

たから、今日でも蕭白といつてもはやされてゐる、だから畫家などでも一の自信力を堅めて勇猛にやれば、譬令邪道にもせよ正道にせよ兎に角成功する、それでなければ批評家がこういふたといふては動き、大家がこう描いたといふては動き、生涯人に動かされどうして實につまらんです、云々、

(明治三十二年七月二十八日『京都日出新聞』)

③ 黒田清輝の学校改革案

本校は創設以来国粹主義的方針のもとに運営されてきたが、岡倉校長退陣とともに方針が不明瞭になり、混乱が生じた。そのため一刻も早く新しい方針を樹立して学校の体制をたて直す必要に迫られ、久保田校長心得がその任にあたることとなった。左記の新聞記事を読むと、彼が鋭意学校改革と取り組んでいたことがわかる。

△美術教育談 東京美術學校長久保田鼎頃日記者に語て曰く 美術學校が向來取んとする所の方針ハ暫らく措き單に予一個の希望を以てすれば先づ國內に於ける美術界の老大家を名譽講師若くハ名譽顧問等の名に依りて間接直接に學校に關係せしめ或る意味に於て所謂普通講座の制度を布き敢て修業年限等を限ることなく永久を期して大美術家を造出するの計畫を立つるを肝要なりとす 現在の如く僅々三四年の在學練習を経たるのみの學生等が早くも美術の神髓を會得したるかの如く誤解し旗幟を樹て、何派何流と自稱し意氣揚々世に特立せんとするが如き風あるに於てハ日本美術の發達を妨ぐるもの少なからざればなり云々 説得て肯綮を得

たりといふべし

(明治三十二年三月六日『万朝報』)

一方、このような時期に登場したのが黒田清輝の改革案であった。これは明治三十二年二月頃公表されたもので、その原本は今日所在不明であるが、幸いなことに明治三十三年三月二十五日から翌四月十七日までの間の『二六新報』に全文が掲載されているので内容を知らることができる。最初に掲載されているのは「美術教育の方針」で、次が「黒田清輝氏の美術教育に関する意見書」(原題の記載なし)である。前者については次のように執筆のいきさつが記されている。

美術界消息

○故外山博士と黒田清輝氏 是は寧ろ外山氏の逸事とするが穩當であらうが、亦美術界の一佳話として傳ふるに足るものであるから、本欄の店開きとして、先づ此事から始めることにした。

帝國大學では代々の大學總長の肖像油畫を額にして懸けて置く例なので外山氏もそれが必要になつた、所で此肖像は御當人の望みの畫工に囑む例になつて居るので、外山氏は黒田清輝氏を名差して頼んだ、但し相識の間柄では無かつた、が、已常黒田氏の畫風には意を傾けて居たので。

右は一昨^(三十一年)年の十一月頃で、外山氏が例の圖書館通ひを始めた頃の話。黒田氏は右の申込に對し、貴囑謹んで承知した、然し拙者は他の畫工の様に現在の人を描くに其の寫真から書くことはお斷りせねばならぬと申送つた、所が外山氏は無論お囑みする以上は

實物を寫して貰いたいとあつたので、黒田氏も快よく引受けた、所で次に豫め定めて置かねばならぬのは場所と時間の事である、私の宅でも宜いがチト邊鄙でお氣の毒だから、いつその事私の方から貴下の美術學校まで行て描いて貰ふことにしましやうとの外山氏の申出でに、黒田氏も頗つたり叶つたりの好都合を喜び時間をも毎日午後一時半と約束した、

兎角一度大臣でもすると、異に氣取りたがるものだが、外山氏にはチツトも爾う云ふ風が無く、自分から美術學校まで通つて來ると云ふ其事が既に黒田氏に取つては非常に愉快を感じた、其上に外山の來るのがキチンと一時三十分で、一分たりとも約束を違へぬのには益感心したさうな(未完)

(明治三十三年二月二十四日『二六新報』)

美術界消息

○故外山博士と黒田清輝氏(承前)斯くて此兩人は毎日相會ふので、種々な話から遂に繪畫の談にも及んで見ると、仲々談せるので、黒田氏も段々本音を吐き、外山氏も大さう其の意見に賛成を爲し、是非黒田氏の意見を實行して見たいと云ふ考を起したソコで兎に角其意見を一通り書いて見せて貰いたいと云ふ事になつた、黒田氏も是まで度々有力家にも話して見たが、ドウも心から解つて呉れて、ソレで其通り是非實行したいと云ふ様な篤志家に出つくはした事が無いので、此の外山氏に對しては大さう知己の感を爲し、早速一篇の意見書を作つて出した、今日の本紙上段に掲載し始めた『美術教育之方針』は即ち其れである、是は未

だ一般に公にしたことは無く、ホンの一部少數の當局者の間にのみ知られて居るのであるから、讀者は十分精讀玩味されたい

斯くて外山氏は之を文部の當局者及び美術教育に關して居る重だちの人々にも見せ、越えて翌年(三十二年)の二月中ば頃であつた、右の人々凡そ十幾名と云ふを、外山氏が會主で某所へ招待し、段々各自の意向を聞いた所が、皆な其趣意には大賛成であると云ふ事で、外山氏も黒田氏も頗る満足で其時は散會した、

ソコで各自十分の考案を立てた上で尙第二會を催し、今度はいよ／＼其の實行方法を相談する筈であつたのが、段々と延々に成り、遂に今日に到り加之肝腎の外山氏が圖らずも冥土の人に爲つて了つたので、黒田氏は少からず力を落して居ると云事。知己容易に得難し、洵に一大恨事と謂ふべきである

(明治三十三年三月二十五日『二六新報』)

このように、「美術教育の方針」の方は外山正一(嘉永元年(明治三十三年三月八日)の要請によつて黒田が執筆したものであり、外山はこれを文部省の当局者や美術教育の關係者十数人に示し、賛成を得て、実行方法を協議しようとした段階で死去してしまつたのだという。右の解説によれば、黒田がこれを執筆したのは明治三十一年末頃ということになる。

外山正一はもと静岡藩士。著書調所に入り、次いで開成所教授方となり、慶応元年に幕府の命によりイギリスに留学。明治五年アメリカに留学し、ミッション大学で哲学、理学を学び、開成学校、ついで東京大学教授となり、同三十年総長に就任。翌三十一年四月から

二ヶ月間、伊藤内閣の文部大臣をつとめた。かつて森有礼と近しく、本校開校直前の頃はフェノロサ、岡倉寛三らの美術学校構想に敵対する側に立っていたことは既に記したとおりである（第一巻104頁）。

もう一方の意見書については、その初回掲載分の冒頭に

黒田清輝氏の「美術教育の方針」は先に本紙に續載したれば讀者は氏の意見の存する所を了せしならん、尙氏が當時其筋に向つて提出せる意見書を得たれば本欄に掲ぐることにせり

と記されているのと、最終回末尾に、

編輯者附記す、此意見書は黒田清輝氏が明治三十一年頃、即ち故外山博士と始めて相識りたるの時代の意見にして、要するに黒田氏一家の言たるに過ぎず、^{〔不明〕}□に今日の實際に於て尙此意見を固守し居らるゝや否やは自から別問題に屬す、特に氏は今度其筋より美術制度取調の爲め洋行を命ぜられたれば「明治三十三年三月二十一日発令——編者註」歸來如何なる意見を發表せらるゝや未だ逆め知るべからざるものあり、旁方此意見を以て直ちに黒田氏が今日現に主唱しつつあるものと做すなきを要す

ということわり書きがあるのみで、いかなる事情のもとに「其筋」へ提出したのかは不明である。また、本篇と「美術教育の方針」との関係もはっきりしないが、本篇の内容が東京美術学校改革の全体的構想であるのに対して、「美術教育の方針」は絵画教育改革のみを論じており、総論に対する各論の意味合いを感じさせる

ので、執筆順序は本篇の方が先きだったように思われる。

「其筋」が文部大臣ないし文部省であることは殆んど疑いを容れない。校長でもなく一教授にすぎない黒田がこうした行動をとったことは子爵黒田清綱の嗣子（大正六年襲爵）という社会的地位の高さを自他ともに認めていたためでもあろう。因みに、明治三十二年四月一日、黒田は本校から京都出張の辞令を受け、同日、文部大臣樺山資紀（明治三十一年十一月～同三十三年十月在任）の学事視察に随行した。随行者は専門学務局長上田万年と大臣秘書官正木直彦、および黒田の三人で、京都市美術工芸学校、武徳殿新築工事、高等学校、京都大学その他を、大阪で工業学校、木津川沿岸や河口附近の工事、安治川の光景を視察したが、黒田の随行は美術学校改革問題と多分に関係があると思われる。というのは、随行者の顔ぶれが「一時大に美術學校を改良するの簡があつた」（52頁『時事新報』記事参照）という上田万年と、のちに校長として本校に乗り込む正木直彦、および黒田であり、しかも第一に京都市美術工芸學校を視察しているからである。このことは、黒田が上記意見書の中で本校から工芸部門を分離することを強く主張していることと、折りしも京都に官立美術工芸學校を設置することが帝国議會で可決し（三十二年三月）、文部省が本校や京都市美術工芸學校の科の統廃合などを含む具体的設置計画の検討を始めたことを考え合わせると、本校改革、就中工芸分離の準備ということを一つの目的としていたと考えられるのである。なお、この三十二年十二月には黒田と久米桂一郎が文部省の命を受けて京都の美術工芸取調べを行なっており、これについては同月六日付『京都日出新聞』に「右は官立美術工藝學校

を當市に設置の準備及同校設置の上は東京美術學校學則改正の必要あるを以て夫れ等の事に關し調査を囑託されたるなりと云ふ」とあるので、本校改革を目的とする取調べであったことは明白である。

いづれにせよ、右に述べたことは黒田が本校改革を非常に積極的に進めようとしていたことと、文部省が彼の意見を尊重していたことを示すものである。しかし、根本から本校を変へることになつたかも知れない黒田のこの改革案は実現を見ずに終つた。実現を阻んだ第一の原因は本書第一卷(272頁)に記したように、京都の官立美術工芸學校設立問題が美術ではなく工業教育関係の有力者たちの手中に歸したことであろうが、『時事新報』の△△生(大村西崖)などの発言(52頁に掲載)に信を置くならば、浜尾新が真正面から反対したことなども一つの原因であつたと考えられる。

以下兩篇を転載する。『二六新報』には毎回標題と筆者名が記されているが、ここでは初回分のみ記載し、ルビは必要と思われるもの以外は省略し、原文以外の句読点が必要な箇所は一字あける。なお、意見書の方は原文に標題が無かつたのか、初回掲載分には標題が記されておらず、第二回掲載分から「黒田清輝氏の美術教育に關する上申書(第三回掲載分において意見書と訂正されている。)」という仮題が附されている。

美術教育の方針 黒田清輝

▲美術教育の方針は將來必然の趨勢に隨ふべし。

今や維新の政變ありてより茲に三十餘年、是人生一代の變り目とも云ふべき年時を経て一たび破壊したる社會も漸く其組織を定めんとし、社會の精華たる藝術は數回の動搖を経て其端緒につき、將に着實なる發達期に向はんとするの時なり、此際に臨みて美術の教育に適當の方針を確定し、其進路を開かん事は極めて緊要の問題なりとす。然れども此問題は、輕々に一決せらる可らず、藝術は時代に應じて社會に現はるゝ自發的產物にして、強て方針を定めて、其發達を左右すべきものに非ず、助長の方針は却て危害を招くべく、寧ろ自然の發達に任するに如かず、公正なる着眼を以て現今の時代を觀察し、既往の經歷と現時の實狀とに鑑みて將來の趨勢を斷定し、其最も自然に且最も正當なる傾向を豫知して、將に就かんとする路を擴開せん事、是を採るべき方針とは云ふなり。

△世界競進の時代

今日は如何なる時代なるかといふに、實に世界競進の時代なり、器械の便利日に開けて、世界の面積は時間の上より縮減せられ曾て絶東遼遠の一隅に僻在したる吾人の邦國も、競進の渦中に投せられ、泰西の氣運は直ちに我事物に影響を及ぼせり、況んや藝術には、素より邦國の領界なく、相互交換して新しき精華を發せんとするに如何なる強力の帝權あるも、之を避くるの術なからん、此の如き時代にありて先づ斥けざるを得ざるものは、保守思想と鎖國思想にして、苟も事物の發達を欲するものは、須く眼を開きて世界の形勢を熟察せざる可らず、東洋の藝術が歐洲に知ら

れたること日猶淺しと雖、彼の技法に革新の機動を與へて、着々として其面目を改め、種々の技術に日本趣味の頗りに採用せらるゝは事實なり、而かも歐洲の藝術には確乎たる基礎の存するあり、其趣味の變化は極めて面白き結果を現はせり、或は此狀態を見て深く其實を究めず、西歐の美術は漸く日本化したるべしとなし、曾て其外客が、投機的論鋒を鼓舞して、眞正の美術は獨り本邦に存すといへる諛言を信じ、舊法を墨守して敢て時代の遷移を顧みざるが如きあらば、我の長處は悉く歐人の爲に活用せられて、我藝術は遂に無能の涸泉朽木となり果つべき徵候は既に今日一部の上に顯はれたるに非ずや、されば我藝術を開發するの策を議するに先ちて、泰西藝術の性質を知りて、其向後の大勢を測らん事至當の順序なるべし、何となれば彼の形勢は以て我將來を卜するを得べければなり

(三月二十五日付)

▲歐洲之藝術

今の世紀は科學の時代なり、科學思想の發達が美術の變動を誘ふは自然の勢にして、歐洲の藝術が此變化を受けて蹉跌することなく、却て新思想を發揚して新しき方向に進歩の跡を顯はし、一種の光彩を輝すものは其故なかるべからず、思ふに彼美術は鞏固にして動すべからざる基礎の上に建てられたるものにして、此基礎たるや、假令人文の進運如何なる方面に向ふとも易ることなく、假令千古の久しきを經るも變ずべからざるなり。

▲希臘は歐洲藝術之基礎

何れの邦國又何れの時代を問はず、造形的藝術の完全なる發達を爲したること、希臘時代に比すべきものあらざれば、公正なる鑒識を有するものゝ等しく認諾する所にして、希臘の土地と上古の生民と其時代の境遇及び習俗は、美術の培養に適當なるあらゆる條件を具備し、最も自然に且つ最道理的なる物形を作り出すの道早く生じて二千餘年を隔てたる今世に向つて確乎たる基礎を與へたり、今の藝術は、其變態様々なりとも、其根元を養ふは希臘遺作なること忘るべからず。

希臘の藝術は、中古の暗黒時代に至りて一旦廢滅に歸し、開化の光消えて社會は幼稚なる人間の原性に退き、道理的物形を造るの術、一時歐洲の諸邦に忘失せられたるが此間に生じたる藝品は、幽冥なる宗教思想を表現するが爲めに、今日之を研究するものなきにあらざれど、固より一部の好奇家が、趣味の珍奇なるを賞翫するに止まり、敢て美術の眞價を屬するに足らず、爾後一千餘年を経て、以太利の舊土に文藝復興の氣運熟するや、從來の無氣無能なる藝術は影を納めて、道理的藝術は次第に諸邦に起る此氣運を促したるは、希臘美術の遺作多く發見せられて、藝術振興の道開けたるに依る。

▲復興時代の藝術

復興時代の藝術が、希臘遺作の完全なる物形に倣はんが爲に、資を求めたるもの、一は天然の實寫に依りて技法を練り、一は學理の教に依りて物形の眞を確實にせり、健然なる人體を作るを以

て藝術の心髓とし、又修養の基本としたるは實に希臘術の精神にして、復興時代より以降現今に至るまで承繼して渝らざるもの歐洲藝術の特色たる所なり。

(三月二十六日付)

▲近代の思想

修養の方法と技術の精神とに於ては、今の美術は復興時代の美術に異ることなし、其異なるは思想にして、一層深く天然に親接したるを覺ふ、近代の思想は感情に重きを措くものなり、最看易き實例を文學の風潮に假りて論ずれば、政治の大革命に先ちて既に此新思潮は動き、ギョテ先づ出で、シャトオブリアン、ロオル、ピロンこれに次ぎラマルチヌとキクトル、ユゴオとありて「ロマンチック」一派の聲は歐洲諸邦に響應して古典派を破りシエクスピアの豪宕雄偉なる構思ラシヌの端嚴典雅の氣格に代るに多趣多感なる人情及天然の表象を以てしたるは顯著なる事實にして、之に達したる手段は、天然の觀察を主としたるにあり、繪畫も亦これと同じき進路を取り、復興時代の繪畫は多く題目の宗教に取れり、其主とする處は體形の穩當を得て、能く全局の勾配を整ふるにあり、而して宗教畫、歴史畫等の意を畫面の布局に傾くるものは、因襲の久しき一種の範型を生じて、自然を外れて形式に依るの弊を爲せり、ロマンチック派の繪畫は、文藝の氣運に誘はれて天然の情趣を描出さんとす、茲に於て藝術は益益天然に親炙して技法を一新し、繪畫を學ぶには天然を學ぶを以て最良の手段となし五十年前の畫風は、天然の寫眞的摸倣の極度に達した

り、然れども、これよりして畫題の範圍擴張し、技法の自由開けて、個人の思想を發舒し得るの道新に生ぜり、一方にはドラクロアの一派ありて人事的方面に新思想を表出してアングルの古典派と争ひ、一方にはコロ、ルウォン、ミレの輩は天然に對する自己の情緒を絞べて復興時代の藝術が全く度外視せる風景の一派を建るあり。

▲有力の大家は時勢の先見あり

茲に注意すべきは、文藝にありても將た繪畫にありても、有力なる大家は世に先んじて時代の趨勢を看破し、將來の思潮を開發誘導するものにして、或は爲に其當時に容れられず、而かも一派の始祖と仰かるゝことなり、以太利復興の藝術は十五世紀の末年に現れたるも、百年以前の大家は、早く既に一種の傾向を示したり、ギョテや、キクトルユゴオの名を顯したるは、其壯時にあらずして其の晩年にあり、ドラクロア、コロ、ミレ等が作品を出したる當時にありて、世の藝術は只管天然の實寫を力めて未だ情趣を發揮するに至らず、渠等の時代は遂に此偉才を容れず、一般の進運は其死後に確かめられたり。

(三月二十六日付)

▲科學の藝術に及ぼせる効果

現代科學思想の普及は、藝術に觸接して効果を顯はさざる能はず、技法の上に於ては調色の一新せる如き其著しき一例なるべし從來の繪畫は線形を以て唯一の要件とし、色彩は構思を助て其

調和を得るの用とするのみ、復興時代のエニス派が色彩を以て稱揚せられたる以來、技藝家は常に畫室内にありて見る所の物色を寫して著しき進歩を爲さざりしが、近代の自然派が天然に親炙して技法を研ぎたる結果は、漸く調色の法を一變し空氣と陽光との種々の状態に隨ひて變化する物色を描出するに至る、是に於てか歐洲繪畫の素養は、希臘術に基きて人體の學理的形相を寫すによつて確かめられ、自然の道理的色調を加味して深遠なる感情を發露せんとす、是を今の時代に適應したる繪畫となす、

▲最近の傾向は想を寫さんとす

最近の繪畫は、寫實より脱化して寫想に赴かんとするものなり、今や形に色に天然の實想は殆んど究め盡したりといふべく、是より新たに起らんとするは精神的方面なり、曾て開けたる印象派の主義は調色の革新にありと雖、其結果として色彩の心理的印象を描寫し、視官の實感以外なる感能に訴んとす、別に「サムボリスト」と稱する一派は、同じ主義を線形に適用して、情機の微妙なるものを發表するの目的を以て輓近に起り共に天然の複雑なる顯象を絞するに簡明の手段を取りて、道理的人間の性情を啓發せんとす、未だ現今の藝術に大なる勢力を有せざれども、之を以て將來に生ずべき傾向の一斑を徴するは決して誤なからんを信ず要するに將來の藝術は學理に背かずして思想を描出するものなることを斷言すべし

以上は歐洲藝術の概勢なり、是より我邦繪畫の現状を究めんとす。

▲日本の風土は美術に適す

日本の土地は山嶽溪流に富み、四圍の海濱は皓潔なり、順和の天候は花卉草木の生育に適し、至る所の肥田沃野は國民の生計を簡易にして、世路の艱險を知らざらしむ、之を西歐の天地に比すれば、宛然たる樂境なり、此の如き國柄は美術の培養に適當の要素を有して古來一種の藝術開け、歐洲の藝術と其趣を異にし、世に賞賛せらるゝも宜なり、就中繪畫は最も奇抜なる趣味を有し其技法は練熟したり、東洋の一孤島たる日本が、歐洲に多少の勢力を及ぼしたるものは、國力の富強なるが故にあらず、歐化の速かなるが爲にもあらず、全く此奇抜なる一種の藝術あるが爲なり、されば此藝術を衰頹に陥らしめず、益々之を開發して國光を揚ん事は、國民の等しく希圖せざるべからざる所なり、然るに現今の狀態を察するに徒らに其美術國なるを恃みて漫然我繪畫は世界の特技たるを誇るも之が發達の道を講ずるに冷淡にして、今の美術は枯凋自滅の悲境に瀕したるを奈何せん、

日本の繪畫は、其技法を唐宋に學びたるも我國に移植して一種の方法に發達したるが、近代外國交通の始りてより新に起りたるは四條、圓山の所謂寫生派なり、此派の天然を究めたりし結果は花鳥畫の技巧に一種の進歩をあらはしたりといふべし、明治年代に入り歐洲の文物移入せらるゝや、洋畫の技法模倣せらるゝに至りて、繪畫は茲に基本據を失ひ亂雜名狀すべからざる觀を呈したり、今之を現時の實況に徴すれば、略下の如きものあり、

▲方今の現状

從來の繪畫を作るものに二派あり、舊派は古法を墨守するものなるを以て、其畫風ハ沈着したりと雖、現今の時勢に適せず、其技は日を追ふて退縮し、古人の開きたる範圍以外に天然の情趣を敍し、若くは自己の思想を表するの能力を失ひたり、新派は世變に應じ開發を謀らんとするものにして、其主義は賞すべく其製作に見るべきものありと雖、修養の道を誤るを以て、完全なる成功を見るべき望なく、動もすれば奇狂に奔るの弊に陥る、洋畫を學ぶものにも亦二派あり、一は唯洋風の外形を模倣するものにして、天然を寫すことを爲さず、一は天然を主として進むものにして、其方法は將來に向つて望みあれども未だ想を寫す程の熟したる技能なきが故に世人を満足せしめざるなり 以上を概言するに、方今の藝術は或は古人の筆法雄快なるに感じて時代の變遷を忘れ或は洋畫の變化自在なるに驚きて其理を究むるを知らず、或は理想の重んずべきを知りて之を描くの手段を講ぜず、或は眞を寫すに勉めて想を寫すの域に達せず、斯く種種なる方向を模索したけれども世は既に藝術の萌芽を生ぜんとするの時期なれば、此際確乎たる將來の方針を講究して其進路を開かんこと極めて切要なるを認むるなり

(三月二十八日付)

▲美術は天然に基き學理に依て發達す

古來の歴史に徴するも美術は天然を基とし學理の應用に依て發達するものなり、希臘美術の發達したる所以は、人體の美を賞する習俗中に學理を應用するの知覺を備へたるが爲めなり、復興時

代のフロランス派に線形の美の發達したるは、古典學と人體解剖學との開けたるに伴ひエニス派が色彩に長じたるは顏料の發明與つて力ありといふべく、近くは現代科學の發達と共に、歐洲繪畫の一新したるが如く、學理應用の程度如何は直ちに美術發達の程度を定む、新たな美術の興るや新思想の表顯に適する學理の應用なかるべからず、此思想と學理と相待つて茲に始めて完全なる一種の技術は發達すべし

其國土は如何に美術に適するも、其國民に如何なる美術思想ありとも、美術は無爲自然に勃興すべきにあらず、又其發達を永續すべきものにあらず、希臘の術美は如何に秀絶の作品を出したるも、以太利の繪畫が如何に進歩したるも、或る時代に至り新らしき學理を應用するの路窮りて遂に廢絶したるにあらずや、單に國土の佳良と國民の氣象とに依りて美術は進むべしとせば、今の希臘は何故に美術は生ぜざるや、又以太利の繪畫が今日振はざるは何ぞや、我邦の如きも亦然り、日本は山水の美あるを以て美術國なりといふを得ず、又日本は古來多くの佳作を出したりとて、永遠に美術の發達すべきを恃むべからず、同じく日本にありても時代によりて美術の性質は一様ならず其程度にも等差あるを見れば、之を發達せしむる方向と程度との必ずしも同一ならざるを知るべし、今に方りて時勢の如何を察せず、開發の道を講ぜざれば如何に美術の素質良質ありと雖も、充分なる發達を見ざるのみならず、或は天成の美質をも全く失ふに至らんとす

▲我邦に適したるは從來の繪畫なり

されば如何なる繪畫が我邦に適し、如何なる方針が將來發達の路を開くに必要なるやと云ふに、從來の繪畫が最も日本の思想を表示するに適せりと答へんとす、然れども從來の描法を固守するは發達の氣運を進むるにあらざりて、單に舊物を保存するのみ保存は退歩の初めに於て、退歩は壞滅の兆候なり、事物の發達は元來窮極あるべからざるに一たび發達したる技法にのみ依頼するは不可なり、古來藝術の最盛期に次で必ず衰運の來るものは新に進むべき路塞りて、先進者の成法を模倣するが爲めなり、今の時勢は世界競進の世にして、今の時代は道理の時代なり、日本の繪畫を開發して歐洲の藝術と競んには道理に基きたる新式の修養を爲んことを要す。

(三月三十日付)

▲繪畫當初の目的は寫實にあり

繪畫の技術は天然の眞を寫すを當初の目的とするは、何れの國何れの時代と雖も異なることなし、而して繪畫を作り、趣味を興へ思想を發揮するは技藝の能力にして箇人の資性に待つ所大なりと雖、抑之を發揮するの手段に熟せずしては如何なる思想の美ありとも、之を用ゆるの法なからん、寫生は實に繪畫の根本的要件なり

▲姑息の改良法

從來繪畫の革新を論ずる者は、歐洲藝術の長處を取りて我短處を補ふべしとせり、是れ甚だ良し、今の時勢は實に斯くあるべき

を命示したり、然れども世の改革者の多數は徒らに技巧の外面にのみ眩惑して姑息の手段を試むるものなり、渠等の洋畫を見るや、陰陽濃淡の變化に富み、光線遠近の差別を現したるが如き皮相の結果を以て彼の特長なりとし、直に之を取りて繪畫の外見を新にせんとす、此の如き主義を以て、所謂和洋の折衷畫なるもの續々として作り出されつゝあるなる、是最も厭ふべき改良法にして彼の長を取るを知らずして、彼の技巧を模倣するものなり、何をか模倣と名くるやといふに既に發達したる技法を踏襲するを模倣なりといはん、模倣は新たなる發達を杜絶するものにして其弊害は私の美質を犠牲にして却て彼の短處を得るの結果を生ずべし、畢竟歐洲藝術の今日ある所以の理を究めず、又我短處の何の邊にあるやを察せずして姑息の改良を企るものにして決して新たなる藝術を興すの道にあらず、

▲歐洲藝術の長處

思ふに歐洲藝術の美質は根本の修養にあり
希臘術の開けたる以來彼は間斷なく天然に就きて技法の開発を求めたり、彼の長處は既に發達したる技法よりは之を發達せしめたる手段にあり、故に其藝術は思想の變遷に應じ又學理に依り常に改良し得べき路の開けて今や完全なる學理的の修養法を以て藝術の本源を養ひつゝあり

▲我之短處

技藝にありても亦他の學術にありても我邦人の短處は眞摯なる

途あるのみ(完)

(四月一日付)

黒田清輝氏の美術教育に關する意見書

一 必然の趨勢を察し現代の思想に適したる美術教育の方針を確定して日本美術の發達を計るべし

今日の時代は世界競進の時代にして世界的思想は交通區域の擴張するに隨ひ日を逐ふて増進せり 獨り美術のみ舊來の成法を脱せずして永く其技を維持せんこと到底望む可らず 此特勢〔イマ〕に抗して保存的方法を講ずるものは一トたび發達したる技法を模倣するに止まれり 凡そ既往の開化が産出したる形式は死したる形式なり 死したる元素を以て生物機關の生存を維持すべからざるは社會哲理の原則にして美術も亦此理の外に出でず 宜ふなり 古人の舊套〔不明〕を□守する一派の藝術の今は其空骸を残すに止りて全く其精神を亡失したるや 今日急務は老衰したる我美術に新知識を注入しこれを復活して新思想の表顯に適當なる美術を開發するにあり

二 美術と工藝とに嚴正なる分離をなすべし

我邦にて從來錯誤の甚しきは一般藝術と純正美術と又工藝品と美術作品とを混じて一となすにあり 之より生ずる弊害は決して少しとせず 各國慣法の異同は敢て論ぜず 美術と工藝との間に限界を生ずるは根本の目的既に相反するに依る 加之美術は自

己の思想を顯はすを主とし工藝は他の嗜好に投ずるを要す 工藝家にして世情を察せず徒らに用途なき製作に耽り將た藝術家にして自己の特技を研くを忘れて時流に左右せらるゝが如きは共に一國の不幸と云べし 歐洲にありて或種の工藝品は趣味の上に於て極めて美術作品と類似するものなり 就中佛國は所謂美術工藝を其長技として世に誇るの國なりと雖も 猶肯て之を美術と混同せざるは蓋し其弊の生ずる所を察するなり、我美術學校は右の誤謬の中に創立せられ之に加ふるに舊技保存の意思を以てし美術修養の力を分ちて其發達を妨ぐるに少しとせず 且美術の標幟を明にすべき専門教育の旨意は一般の見解を確むるが爲に美術の識別に言ふ可らざる混亂を生ずるの實例は既往の萬國博覽會に於ける我美術出品の屢失敗を重ねたるを以て證すべし 是美術と工藝と均しく損害を被るものなり 宜しく速に二種の教育を分離し美術學校にては純正美術の開發に全力を注ぎ有力の美術家を養成せしむべし

三 美術學校は美術家を養成するを目的とすべし

美術學校は美術家を養成するを以て單一の目的として之に適したる教授法を採用せざるべからず 技術の修養に必要ならざる多くの學科を置くは徒に課目を煩多ならしめて實技に用ゐるの暇を奪ふものなり 若し夫れ各師範學校中學校等に於ける圖畫の教員は文部省に於て檢定試験を行ひ博く世の技術家中より之を拔擢するを以て専門學校に於て特に此種の人物を養成するを要せず 然るに從來美術學校は教員を養成する方針を取り其卒業生は各地方

の圖畫教員となり、或^{あるいは}遂に美術學校の教員となるを最大の目的となせり。是豈美術を學ぶの本旨ならんや。宜しく此弊を改めて眞の技術家を養ふ道を開かざるべからず。

(四月九日付)

四 美術學校に於て修むべき技術は日本畫西洋畫及塑造の三科とすべし

造形術の重要なものは繪畫と彫塑とにして其目的は一種の精神を表顯するが爲めに完全なる物形を作るにあり。故に主なるものは物形にして敢て材体の如何を問はず簡易にして充分の技能を顯はすを得べき手段を採るべきなり。繪畫にありて紙又は布に畫くと陶器瑛瑯若しくは織物に寫すと其根原の術は一なるが如く。彫塑にありても泥土にて作りたる形は之を木石牙角に彫り若くは金屬に鑄造したるも之を作るの術は一なり。我邦古代の彫刻物に木製多しと雖も之を美術なりとするは必らずしも木に彫りたるが故にあらざりて顯れたる形の美なるが爲なり。希臘古代の石像を貴重なりとするも石を彫むの術を賞するにあらざり。材体の如何は毫も美術の價値と關係せず。然るに世人は彫刻なる譯語を見て直ちに彫石彫木の工技を以て美術と認むるが如きあらば誤解もまた甚しきものなり。古へ分業の行はれざりし時代に技術家は自ら手を下して木石の彫刻をなせりと雖も今日の彫刻家は原型を作るに止まり彫刻の工技は之に熟したる職工に委任したり。木彫石彫の美術にあらざること石膏鑄型の美術にあらざると同じく明白なる事實なりとす。故に從來の彫刻科の如く木彫の技を主とするを改

めて完全の物形を製出する塑造術を學ばしめて原型に重きを置くべし。歐洲諸國の各美術學校には繪畫彫塑の外に建築科を置く。雖ども建築は工科大学に造家學科の設けあるを以て更に美術學校に於て類似の科を設くるの急要あるを認めず。

(四月十日付)

五 學年の制に代ふるに競技法を以てすべし

美術の修養は他の學藝と其趣を異にし一定の順序を踏み一定の知識を得て業を卒るべきにあらざり。學びて得たる所を活用して其結果を形に顯はすべきなり。習熟の遲速は各人の資質に應じて同じからず。其成績は形となりて顯はるゝを以て知覺的に判定を下すを得べし。故に學力の審定は他の學藝と異りたる方法を採らざるべからず。是歐洲の各美術學校に於て競技法の採用せらるゝ所以なり。然るに學藝學校と平衡を得るが爲め強て學年を分ちて進級せしめ年限を定めて卒業せしむるは競進の氣力を冷衰せしめ有望の技術家をして充分の技能を研磨するの餘地ならしむ。是眞の技術家を養成するの道にあらざり。宜しく之を改めて競技法を以て進級せしむるの制となすべし。

六 卒業證書に代へて賞狀を與ふべし

競技法に依りて學力の程度を定むるとすれば卒業證書を與ふるの必要なし。生徒は在學の年齢を規定し齡滿れば退學せしむべし。競技は之に種類を分ち習熟の程度に應じ順次に各競技に加るを得せしめ最高等の競技に於ける優勝を以て卒業と見做すを得べく

競技の結果は數等の賞狀及び之に添へたる各種の賞を與へ優等者に脩學上の便益を得せしめ之を獎勵するの法を取るべし

七 美術の修養に必要な學科の隨意講筵を設くべし 其學科は美術解剖 遠近法 美術史 考古學 外國語の五科とす 但し外國語は佛語と定むべし

美術の修養に必要ならざる多くの學科を設くるは生徒の課業を多端ならしめ其精神を過勞し爲めに必要の學科に對する力を減殺して實技の練習を妨ぐるのみならず一方には無用の經費を増加すべし 且既に學年を分つの制を廢する以上は實技進歩の程度に應じて必要なべき學科を適宜に學ぶを得る爲に隨意講筵を開き各科の生徒をして隨時に聽講せしめざるべからず

外國語を佛語と定めたるは佛國は世界美術の中心となり諸般の藝術の發達したること彼國に勝る所なきを以て其國語を知るは技藝家に取りて利益多かるべく且つ美術研究に留學生を派遣する場合にも亦佛國ならざるべからざるを以て豫め其語に熟せしむるの必要あるべし

(四月十五日付)

八 實技の教授法は主任教員に委任すべし

繪畫及塑造の技藝科を數箇の教場に分ち主任教員を定めて授業を擔任せしむるとせば各教場に於ける教授法は第一項に述べたる方針に背かざる限り之を主任教員に委任し其責を負はしむべし

美術の諸科は各科に於て之を學ぶの順序を殊にし、流派の如何と

教員其人の意見に應じて自ら同一の方法を取る能はざるあり 故に各科に通ずる一定の教授法を設けて規矩することなく 各教場の主任教員に委任するを以て得策とす

九 参考室を設けて内外古今の作品其他美術に關係ある學術の参考品を蒐集陳列すべし

我邦にありて美術の發達上最も闕けたる要件は参考品の備らざるにあり 今日如何なる天稟の偉才を生ずるとも古來の作品を見て解悟するの道なくしては自然其思想狹隘にして充分の技倆を暢ぶる能はず 美術に要する學科を講習するにも單に聽講のみに止めて標本其他の参考品に就き實驗せしめざれば完全の學識を得ること難し 歐洲諸國にありては博物館の設備整ひて美術家の参考に資すべき古今の作品を完全に蒐集したるに係らず各美術學校には別に陳列室を設けて教育上必要の参考品を集めたり 我邦にありては未だ美術博物館の設備あらざるを以て美術學校内に参考室を整備するの必要は一層切なるを認む 是實に刻下急要なる問題の一なりとす

(四月十七日付)

④ 日本画教育改良問題

明治三十二年三月三日付『読売新聞』に、次のような注目すべき記事が載っている。

●東京美術學校の畫談